

薩摩藩における郷と城下町

森田 浩 司

1. はじめに

薩摩藩は外城制度を設け、鹿児島城下町とその近在及び屋久島、口永良部島、七島、道之島などを除く、薩摩・大隅の2国と日向国諸県郡の領域を113の「外城」として区画していた。この外城制度は島津氏の「人をもって城となす」という政策の大本であり、慶長5年（1600）の関ヶ原の戦いでは、豊臣方の西軍に属して敗北したため、いつ何時にも徳川軍が攻めてくるかわからず、その対策の一つとして外城制度を強化した。

外城というのは、もともと本城に対しての意味であり、島津氏前代において外城は外衛の支城という意味での領内の防衛拠点でもあり、内政上の区分でもあった⁽¹⁾。元和元年（1615）の徳川幕府の一国一城令が出されたことにより、これら外城の城郭は取り壊されたが、いざという時に備えて戦力となる武士は、できるだけそのまま麓に居住させたのである。この麓は中世の麓とは異質で藩の統制下にあり、軍防と行政の機能を持ち、都市計画が行われ、野町⁽²⁾や浦町⁽³⁾が敷設されるなど、薩摩藩特有の集落というべきものであった⁽⁴⁾。

さらに外城の数は、102あるいは120といわれ一定しなかったが、延享元年（1744）以降は、地頭所92、一所（私領）21、計113になった⁽⁵⁾（図1）。天明4年（1784）4月に「郷」と改称したため、外城制度を郷士制度とも呼ぶようになった。

このような外城制度及び個々の外城（郷）やその中心となる麓については、諸先学によって明らかにされている。原口虎雄「歴史手帖 8巻3号（薩摩藩の外城制度と麓）」⁽⁶⁾、押野昭生「『麓』集落に関する二・三の検討」⁽⁷⁾、鈴木公『鹿児島県における麓・野町・浦町の地理学的研究』⁽⁸⁾そして大川晶平「薩摩の外城」⁽⁹⁾などがあげられる。しかし、城下町と外城（郷）における配置的・機能的な視点から考察した研究は、これまで十分には検討されてこなかった。

本来、外城制度は前述の通り外敵からの防衛政策の一つとしてとられた制度であり、郷と城下町の関連性は強いはずである。そこで本稿では、「海上防衛における郷と城下町」、「国境防衛における郷と城下町」、「城下町に近い郷」、「主要経路における郷と城下町」を中心に、鹿児島城下町と外城（郷）や麓のつながりを、城下との位置関係や機能・役割という視点から考察を行った。

なお、藩主の居城が城下町の核にとどまらず、藩全域の核であることは、鹿児島城下町に限ったことではなく、他藩にも当然みられた傾向である。しかし、薩摩藩の場合、制度として外城（郷）と城下が関連性を有しており、かつ機能していたことを考慮すると、他藩とは明らかに性質が異なり、特殊といっても過言ではない。そういった意味からも、他藩よりも薩摩藩の方が郷と城下町の防衛的位置的つながりは強く、明らかな関連性がうかがえるはずである。

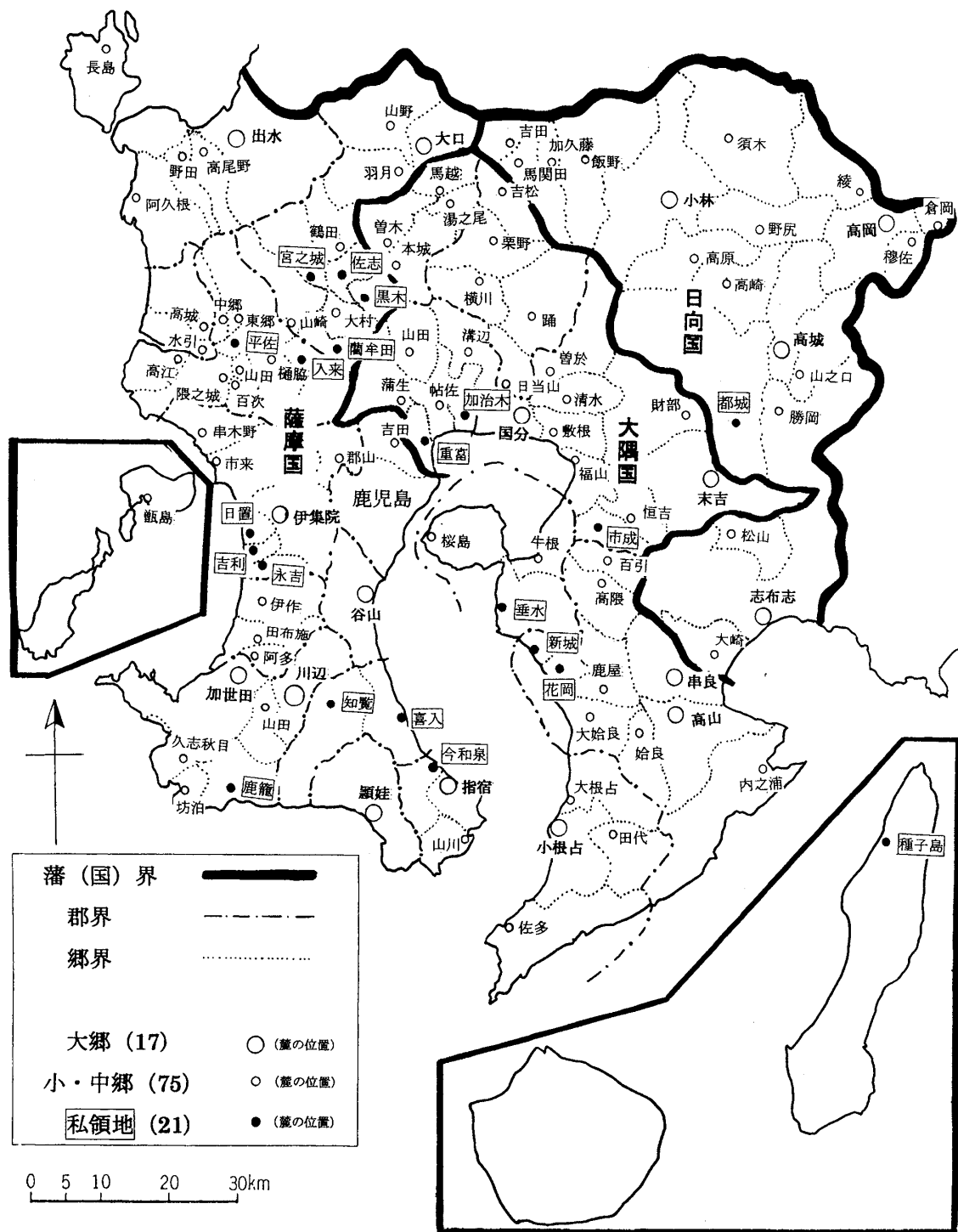


図1 薩摩藩の外城配置一覽
 「薩・隅・日領分絵図」, 『薩摩藩の基礎構造』をもとに原口泉・永山修一・日隈正守・松尾千歳・皆村武一『鹿兒島島の歴史』, 193頁を改変

2. 研究の方法と分析

113ある外城（郷）の郷士数や石高，村数に着目し分析を行うための史料としては、『薩藩政要録』⁽¹⁰⁾、『要用集』⁽¹¹⁾、『薩隅日琉諸郷便覧』⁽¹²⁾、『薩隅日郡村名附』⁽¹³⁾、『薩隅日地理参考抄』⁽¹⁴⁾、『御分国之巻』⁽¹⁵⁾などがあげられる。その中で『薩藩政要録』を用いて郷士数と石高，村数の相関の分析を行った（図2・3）。

薩藩政要録は，写作者や著者などは一切不明である。鹿児島県史料刊行会『薩藩政要録 鹿児島県史料集』は文政11年改編の薩藩政要録（原名：要用集）6巻，並びに嘉永4年以後の改編にかかる薩藩政要録（原名：要用集）1巻を収めたものであり⁽¹⁶⁾，本稿はその中の薩藩政要録5を用いた。

この史料を選定した理由としては，薩藩政要録が「列朝制度」や「薩藩旧記雑録」と並ぶほど，薩摩藩の社会経済や政治構造を解明するまとまった史料であり，簡略的であるものの，法制経済史料として比較的体裁がととのっている史料であるためである⁽¹⁷⁾。さらにすべての外城（郷）の郷士数や石高，村数が記載されており，全外城（郷）の相互関係の把握が行えるのも選定理由の要因である。他のデータは，いくつかの郷の郷士数や石高あるいは村数の記載が欠けているものもあつたり，郷が合併していたりしているものもあるため，全体の把握がしにくい。また，この薩藩政要録は薩摩藩藩政関係の重要な事項をまとめた要録⁽¹⁸⁾であるため，多くの市史や町史，郷土史等で多く用いられており，数字や内容の信憑性が他の史料よりも高いことも採用

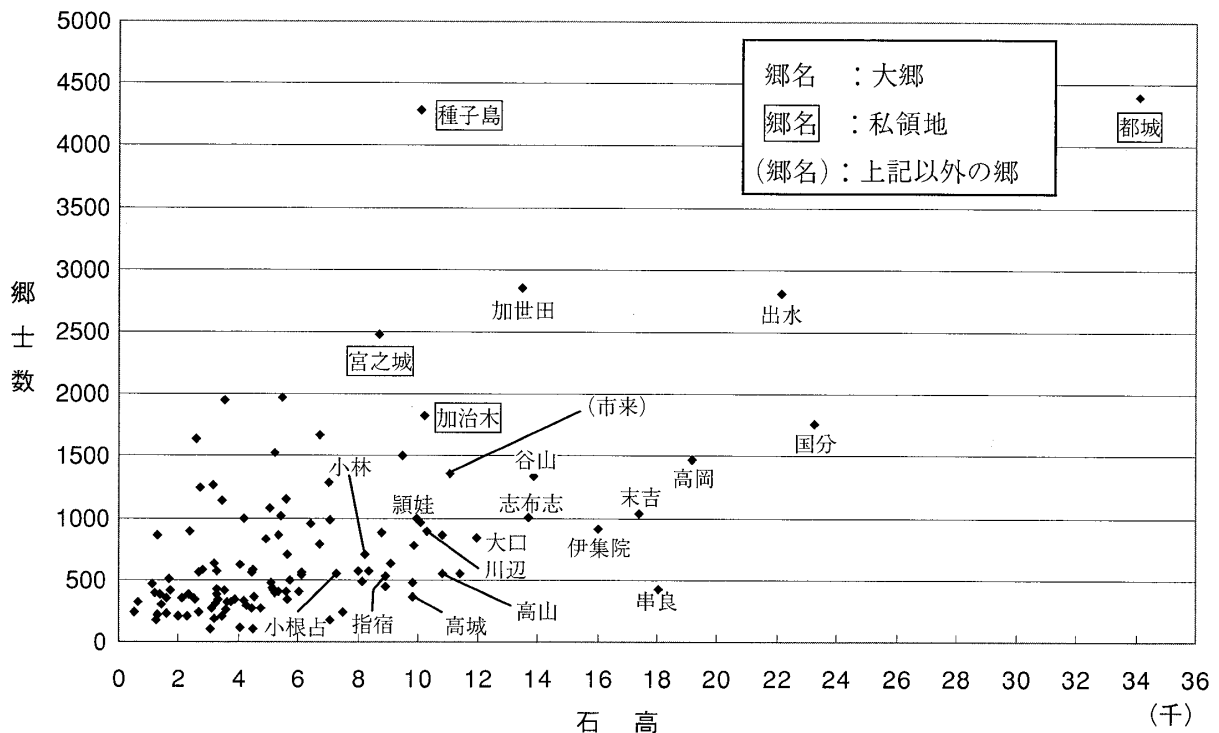


図2 薩摩藩の外城における石高と郷士数の相関
『薩藩政要録』より作成

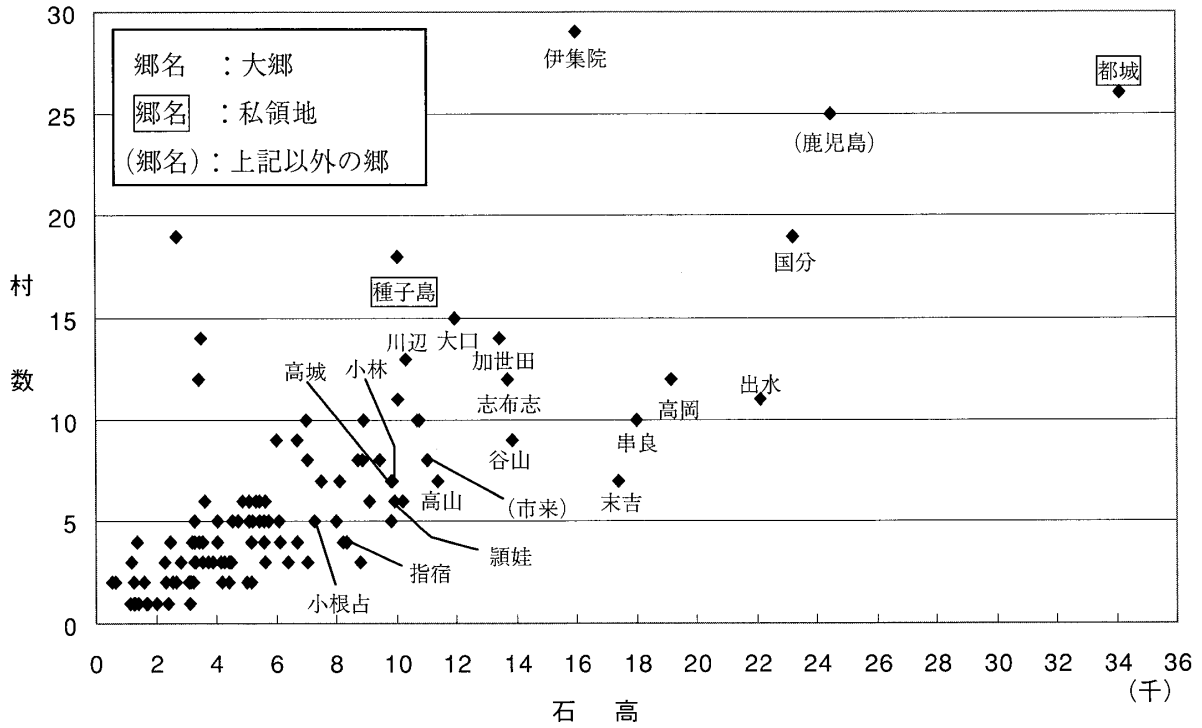


図3 薩摩藩の外城における石高と村数の相関
『薩藩政要録』より作成

表1 薩摩藩における郷の特徴

国	郡	郷	郷の特徴	郷土数	石高	村	陸路の主要街道	港	野町	浦町	境目番所	津口番所	
*	鹿児島郡	鹿児島			24505	25	①②③④⑤⑥⑦	○				○	
		吉田		557	6113	5			○				
	谿谷郡	谷山	大郷	1340	13865	9				○			
	給黎郡	喜入	私領地	997	4183	2							
		知覧	私領地	1976	5463	6		○	○				
	揖宿郡	指宿	大郷	574	8341	4					○		
		今和泉	私領地	424	3290	5			○				
		山川		110	4040	4		○		○		○	
	顛娃郡	顛娃	大郷	997	9952	6			○				
	川辺郡	川辺	大郷	893	10309	13				○			
		加世田	大郷	2853	13458	14		○	○				
		山田		580	2818	3							
		鹿籠	私領地	1265	3130	1							
		坊泊		237	520	2		○				○	
		久志秋目		323	630	2		○					
	阿多郡	阿多		831	4892	6				○			
		田布施		786	6707	4				○			
		伊作		1290	7005	10				○			
	日置郡	吉利	私領地	357	2099	1							
		永吉	私領地	889	2382	1							
日置		私領地	635	3175	2								
伊集院		大郷	909	16012	29				○				
郡山			708	5633	6								
市来			1358	11061	8	①			○	○		○	
	串木野		709	8224	4					○			
薩摩郡	百次		180	1241	2								
	山田		298	1412	1								
	隅之城		956	6396	3					○			

大	伊佐郡	平佐	私領地	1634	2570	2			○		
		高江		344	3320	3		○		○	
		中郷		215	1298	1				○	
		東郷		988	7062	8			○	○	
		入来	私領地	1080	5045	2			○		
		樋脇		630	9087	6			○		
	出水郡	山崎		274	4725	5			○		
		宮之城	私領地	2476	8709	8			○		
		鶴田		417	5164	4			○		
		大村		544	6131	4			○		
		黒木	私領地	420	1720	1					
		佐志	私領地	346	2561	2					
		藺牟田	私領地	508	1659	1					
		大口	大郷	844	11978	15	②		○		○
		羽月		405	6017	9			○		
	高城郡	山野		207	2000	1			○		
		出水	大郷	2810	22123	11	①		○	○	○
		高尾野		856	5337	6			○		
		野田		396	5194	2			○		
		長島		1138	3428	12					○
高城郡	阿久根		531	8893	8	①		○		○	
	高城		1528	5200	5			○			
高城郡	水引		573	8011	5			○		○	
	甌島郡	甌島		1950	3517	14				○	
大	大隅郡	桜島		1249	2705	19			○		
		牛根		395	1197	3					
		垂水	私領地	1669	6723	9				○	
		大根占		341	5639	3					
		小根占	大郷	549	7293	5				○	
		佐多		264	3554	4			○		
	肝属郡	田代		241	2654	2					
		内之浦		99	4482	3			○		○
		高山	大郷	548	11409	7			○		
		始良		179	7044	3			○		
大始良			243	7487	7						
新城		私領地	861	1274	1			○			
花岡		私領地	348	1583	2			○			
鹿屋			359	9825	5			○	○		
隅	串良	大郷	429	18023	10			○	○	○	
	高隅		99	3074	2			○			
	百引		308	3238	2						
	曾於郡	市成	私領地	380	2341	2					
		恒吉		209	3447	4			○		
		末吉	大郷	1041	17410	7	④		○		
		財部		878	8791	3					
		福山		565	2672	2	③④			○	
敷根			387	3285	3						
国分		大郷	1759	23246	19			○	○		
清水			1153	5594	5						
桑原郡	曾於		1019	5443	5						
	踊		401	5331	6			○			
	日当山		352	2495	4						
	横川		577	4476	3	② ⑤		○			
	栗野		485	8130	7			○			
菱刈郡	吉松		439	5109	5			○			
	湯之尾		273	3107	2			○			
	馬越		266	4417	3			○			
	曾木		327	4162	3			○			
菱刈郡	本城		406	5584	4			○			

* 日 向 国	始羅郡	溝辺		362	4535	5			○			
		加治木	私領地	1827	10208	6	②③④⑤⑥⑦		○			
		帖佐		967	10068	11			○	○		
		重富	私領地	567	3270	4			○			
		山田		482	5101	6			○			
		蒲生		1506	9453	8			○			
	熊毛郡	種子島	私領地	4280	10067	18			○			
	護謨郡	屋久島		384	1384	4						
	諸県郡	大崎		858	10788	10			○			
		志布志	大郷	1002	13707	12	④	○		○	○	○
		松山		204	2272	3			○			
		都城	私領地	4397	34124	26			○		○	
		勝岡		418	3527	3						
		山之口		288	4262	3						
		高城	大郷	472	9810	7	③		○			
		穆佐		347	3878	3			○			
		倉岡		229	1592	2			○			○
		高岡	大郷	1478	19159	12	③		○		○	
		綾		565	4436	2	⑥		○			
		野尻		620	4047	5			○		○	
高原			503	5740	5	⑥		○				
高崎			318	3732	3			○				
小林	大郷	778	9853	7			○					
須木		470	1128	1			○					
飯野		550	10791	10			○					
加久藤		442	8929	10	⑤		○		○			
馬関田		182	3194	4			○					
吉田		319	3604	6			○					
国	郡	郷	郷の特徴	郷土数	石高	村	陸路の主要街道 (街道名)	港	野町	浦町	境目番所	津口番所

注1) 陸路の主要街道の番号は郷の麓に大宿次があるもののみ記載してある
注2) 港・野町・浦町・境目番所・津口番所の有無を表している

①出水筋
②大口筋
③高岡筋
④志布志筋
⑤加久藤筋
⑥綾筋
⑦寺柱筋

『薩摩政要録』と秀村選三編『薩摩藩の基礎構造』、『鹿児島県史 第二巻』より作成

した一要因である。

ここでいう外城(郷)には、その構成規模に大小があり、郷土戸数などによって「大郷・中郷・小郷および私領地」⁽¹⁹⁾に区分されており、その中でも特に「大郷」に注目して考察を行った。

結果として、出水・大口・高岡などの国境付近に位置する郷は、当然のごとく防衛目的で郷土数・石高・村数ともに高く、大郷となっている。つまり、郷土数や村数が多く石高が高いのは大郷または藩の要所である郷となる傾向が明らかである。その一方、一部例外として指宿・小根占は郷土数・石高・村数のすべてにおいて他の郷と比べて少ない割に大郷となっている。以下その理由をふまえて、鹿児島城下町とその他の郷の配置的關係について論じていく。

なお、表1の末吉郷の郷土数は、鹿児島県史料刊行会『薩藩政要録 鹿児島県史料集』では141人と記載されているが、本来の鹿児島県立図書館蔵の「薩藩政要録」では1041人と記載されており、前者はおそらく入力間違いであると考えられるため、本稿は後者の数字を用いてある。

3. 海上防衛における郷と城下町

第2章の図2・3より、郷士数・村数が多く石高が高いのが大郷となる傾向が明らかとなったが、その中でも一部例外がみられる。表1から読み取れるように「指宿」は郷士数574人、石高8341石、村数4であり、「小根占」は郷士数549人、石高7293石、村数5となっており、郷士数や石高、村数も少ない割には「大郷」になっている。大郷の郷士数の平均値は1134人で石高は13879石であり、その数値と比べてもはるかに郷士数・石高ともに低いことがわかる。さらに表1、図3からも明らかなように大郷の中で村数が5村以下も指宿と小根占のみである。

このように大郷と指定されつつも郷士数・石高・村数が少ない理由としては、図1・図4①から見てわかるように鹿児島湾の入り口にあたる東西の郷を大郷にして、海上からの防衛機能を重要視していたことがあげられる。それは、城下町が海からの防衛的機能に乏しいためではないかと考えられる。なぜなら、周知のごとく鹿児島城下町は東福寺城、清水城（大乘院）、内城（大

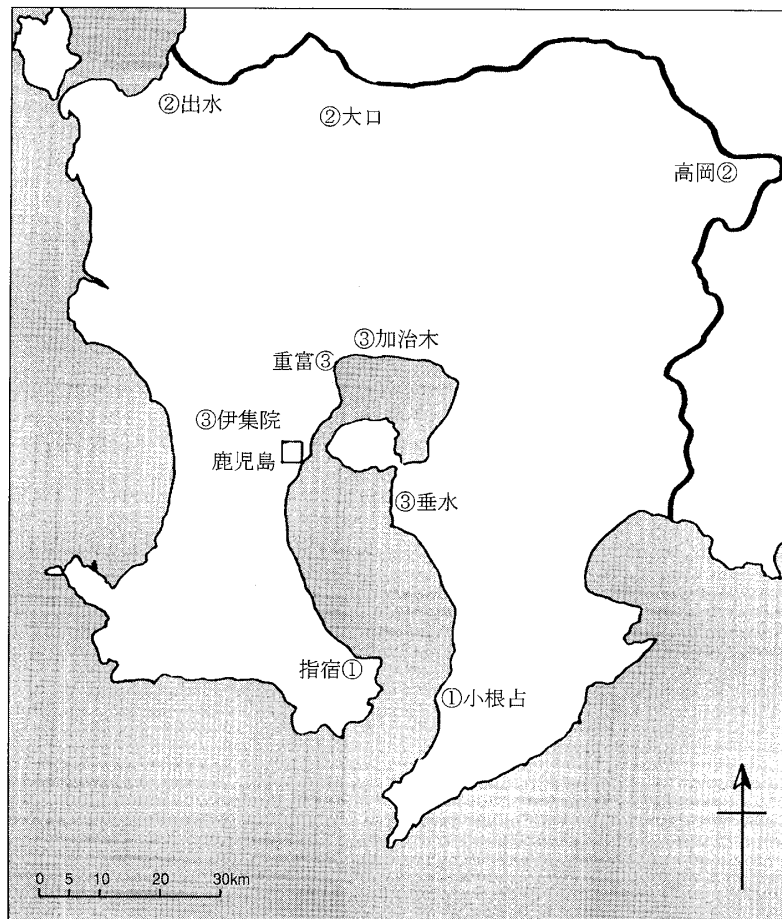


図4 薩摩藩の外城制度における郷の配置

- ① 指宿・小根占 第3章
- ② 出水・大口・高岡 第4章
- ③ 伊集院・重富・加治木・垂水 第5章

「薩・隅・日領分絵図」、『薩摩藩の基礎構造』をもとに原口泉・永山修一・日隈正守・松尾千歳・皆村武一『鹿児島県の歴史』, 193頁より作成

竜寺),そして鶴丸城という順に居城移転がおこなわれるたびに城下を拡張していき,特に近世末期の鹿児島城下町の町屋地区の70%以上が埋め立てによって形成されていた。それは「鹿児島城下町割図」⁽²⁰⁾や「旧薩藩御城下絵図」⁽²¹⁾(「旧薩藩御城下絵図」復刻⁽²²⁾)の2枚の絵図を見比べれば,海岸が埋め立てられていることが伺えるだけでなく,さらに海岸から藩主居城の鶴丸城までの距離も他の城下町に比べてはるかに近いことも明らかである。また,内城から鶴丸城へ移転の際,「義弘が家久に宛てた書状」の一部の内容に「諸侍屋敷之地あまり海近過候,先年寝占より兵船参候而,既いまの屋形二矢を射籠候」⁽²³⁾とあり,義弘は鶴丸城があまりに海に近いので,海から攻撃されると弱いことを指摘している⁽²⁴⁾。

このように,城下町が海からの防衛的機能に乏しいため,鹿児島湾の東西の郷を「大郷」にして,海上からの防衛機能を重要視していたのであろう。

また,表1からみてわかるが指宿と小根占には浦町があり,漁業を生業とした町場が栄えていたことも一つの要因であろう。さらに小根占では,藩政時代の天保9年(1838)に外敵の侵入に備えて,藩より大砲を借受けて,さらには遠見番所を置き外船の通過あるごとに烽火をあげて,これを報じているほどである⁽²⁵⁾。だからこそ小根占が藩の中で海上に対する防衛拠点の郷の一つであったことが裏付けられる。

4. 国境防衛における郷と城下町

居城及び城下町には,外敵からの攻撃に備え一定の防衛機能をもうけるのが一般的である。例えば,多くの城下町が丁字路や鉤型などの防衛的な道路形態をしていたり,藩主の居城に関しても石垣を高くしたり,深く幅のある濠を有していることが多い。しかし鹿児島城下町の場合は,直線的でかつ整然とした道路形態をしており,なおかつ藩主居城の鶴丸城の石垣が簡素であることからわかるように,外城制度を基盤として個々の麓集落に防衛機能を備えさせていたため,外敵に対しては城下で迎え撃つという認識が他藩よりもうすく,城下町の形態には防衛機能があまり重要視されていなかったようである。

外城制度における個々の麓集落は,中世時代から培った城郭およびその周辺地域を基盤としたものが大半を占め,一国一城令に対しても,城郭を除いただけで郷士はそのまま住ませ,基本的な機能は継続させつつ,幕府の目をかいくぐり,一見すると麓のようではあるが,その地域構造や性質はまさに小城下の機能を有しているといっても過言ではない。特に国境沿いに位置する麓がそれにあたる。図1より国境沿いに位置する郷は,西から「出水」・「山野」・「大口」・「吉田」・「馬関田」・「加久藤」・「飯野」・「小林」・「須木」・「綾」・「高岡」・「倉岡」・「穆佐」・「山之口」・「勝岡」・「志布志」である。表1からもわかるが,その中でも主要経路(図5・6)沿いに位置する麓を持つ郷は「大郷」として特別視されていた。それが「出水」・「大口」・「高岡」である。表1から出水が郷士数2810人,石高22123石,村数11,大口が郷士数844人,石高11978石,村数15,高岡が郷士数1478人,石高19159石,村数12とわかるが,この郷士数・石高・村数のすべてにおいて,他の郷に比べてはるかに高い数値を有していることは明白であり,大郷

の中でも特に高い石高、多くの郷士数であることは図2・3からもわかる。

それは図1・図4②・図5・図6からもうかがえるように、この出水・大口・高岡は国境に位置し、かつ城下へつながる主要経路が通っていることから、経済的に恵まれているだけでなく大郷として、高い石高と多くの郷士・村を有することによって外敵からの侵入に備えていたのである。特に、出水・大口・高岡の麓には、地頭の下に地頭代をおき、その郷に駐在させていたほどである⁽²⁶⁾。これは他藩との境目にあたるので取締り強化のため置かれたものであり、地頭代が大口に着任する時は手当もあった⁽²⁷⁾。

表1からもわかるように、この出水・大口・高岡をはじめ、加久藤・野尻・都城・志布志といった国境に位置する郷には境目番所を置くほど、国境付近の郷を特別視していたことがうかがえる。つまりこれらは、初期の鹿児島城下町が防衛的機能に乏しく、そのため城下に侵入する際、最も重要になる国境付近に位置する郷を重視していたことを意味し、城下町と郷との防衛的連関があったことといえる。

前章を踏まえて、ここで一つ付言するなら、鶴丸城が防衛機能に乏しいから外城制度が発展したのではなく、それは全くの逆で、外城制度が発展していたからこそ、鶴丸城が「防衛性」よりも「政治・経済の中心としての機能」を優先したのではないだろうか。

5. 城下町に近い郷

城下町に近い郷は、「谷山」、「伊集院」、「重富」、「加治木」、「垂水」があげられる（図1・図4③）。石高は、谷山13865石、伊集院16012石、重富3270石、加治木10208石、垂水6723石となっており、第2章の村数と石高の相関図（図3）から見ても、大郷の谷山や伊集院のみが上位にきているが、後の重富・加治木・垂水は村数・石高ともにそれほど高くない。城下町に近い郷であれば、村数と石高がともに高くてもいいはずである。ましてや藩主の居城鶴丸城は上述しているように防衛機能に乏しいので、なおさら重要視されるべきである。

郷士数に関しては、谷山1340人、伊集院909人、重富567人、加治木1827人、垂水1669人となり、大郷である谷山・伊集院よりも加治木・垂水の方がむしろ多くなっている。

重富・加治木・垂水は大郷でなく村数・石高がそれほど高くないが、加治木・垂水に関しては大郷である谷山・伊集院にくらべて多くの郷士数を有している。その要因は、これらの郷が「私領地」であるためである。私領地の領主は家格によって、一門家・一所持・一所持格等の階層がある。徳川の御三家に類する最も重い家格が「一門家」であり、重富・加治木・垂水・今和泉の4家がこれにあたる⁽²⁸⁾。

つまり、鹿児島城下町に最も近い郷には、「大郷」と称される郷や村数・石高が高い郷を配置するよりかは、最も信頼のおける一門家を配置しているのである。この事例は一種の徳川幕府の親藩・譜代・外様の大名配置と統制に似ており、一般的な傾向であるといえるが、それでも薩摩藩の城下町と外城（郷）及び麓との配置的関係には他藩より強い因果関係があるといえる。

6. 主要経路における郷と城下町

城下町と麓との経済的連関に関して、重要になるのが主要経路⁽²⁹⁾である(図5)。ここでいう主要経路は、宿次による公用書状送達の系統をいう⁽³⁰⁾。薩摩藩、つまり薩摩国・大隅国そして日向国諸県郡において、鹿児島城下町との経済的・政治的さらには防衛的連関が強い主要経路の7筋は、出水筋、大口筋、高岡筋、志布志筋、加久藤筋、綾筋、寺柱筋である⁽³¹⁾(図6)。

図5・6より鹿児島城下町を中心として周辺地域へと広がっているのがわかる。主要経路を有する麓は、前記の「国境防衛における郷と城下町」や「海上防衛における郷と城下町」と同様の軍事的な機能が重要視される。いったん戦争が起こると敵からの侵入経路となりうるからである。しかし一方で交通・物流の要所ともなり、政治・経済的機能が付加されていたとみることができる。



図5 薩摩藩の主要経路
鹿児島県教育委員会『天保九年 薩摩国・大隅国・日向国 国絵図解説書』, 1998,8 頁より作成

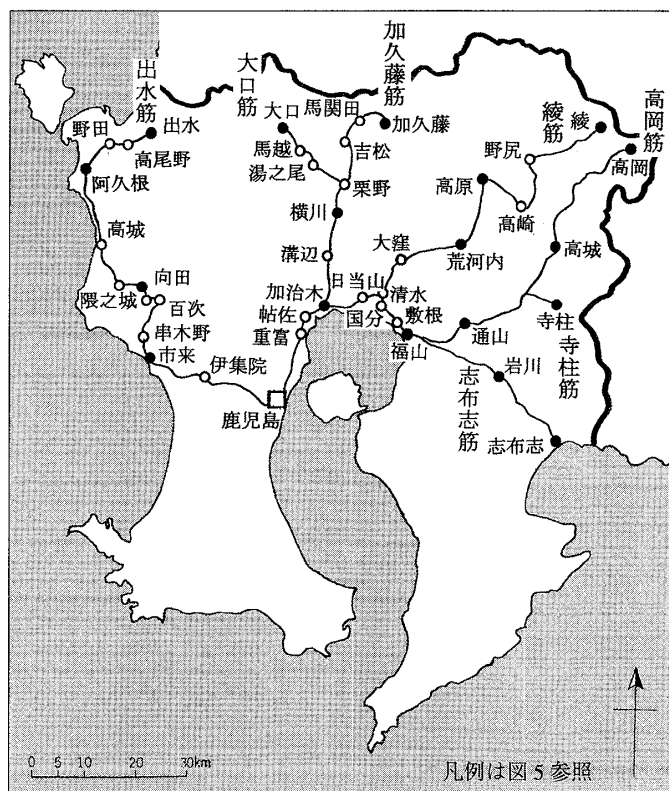


図6 薩摩藩の7筋（主要経路略図）

（出水筋・大口筋・高岡筋・志布志筋・加久藤筋・綾筋・寺柱筋）

鹿児島県教育委員会『天保九年 薩摩國・大隈國・日向國 国絵図解説書』，1998，8頁より作成

特に「志布志」は、志布志筋の最終地点であると同時に城下と大阪間を往来する人々の港としての機能も有していた。また、この外城制度の施行の頃から重要視され、天正年間以降は東の防衛拠点だけでなく、陸海ともにきわめて重要な郷として、夏井・八郎ヶ野番所と津口番所及び9ヶ所の辺路番所をもうけて、藩の行政に大きな役割を果たしていたのである⁽³²⁾。さらに、表1より浦町も有しており、海運によって藩内でも有数の大きな町場として商業の中心地を担っていた。

そこでまず、軍事面に関してみると、『薩藩政要録』⁽³³⁾を用いて、113ある外城（郷）の村数と石高の相関を分析した図3をみると、第4章同様、国境付近に位置する「出水」・「大口」・「高岡」・「志布志」の国境付近に位置する郷は、当然のごとく防衛目的で郷土数・石高・村数ともに多く、大郷となっていることがわかる。前述したように郷の大中小は、その構成規模や郷土戸数などによって大・中・小および私領地に区分されているのだが、その中で国境付近に位置し、さらに主要経路の出入り口にあたる出水・大口・高岡・志布志が郷土数・石高・村数ともに多く、大郷となっているのは、軍事目的のためであり、さらに外敵からの侵入に備えて多くの郷士を居住させていたためである。まさに城下町が防衛機能よりも政治・経済を優先させた結果であろう。

特に志布志のように、軍事的な機能を持ちつつも、交通・物流の要所ともなり、政治・経済的機能をも兼ね備えるのが、この主要経路に位置する麓の特徴ともいえる。

また、主要経路における城下町との距離的なつながりがある例として、「市来」があげられる。

市来は、出水筋における主要経路の一地点であるが、その位置は、国境に面しておらず、海には面して津口番所が設置されてはいるものの、山川や坊泊に比べると海上交通の要所ともいいづらい。そのため大郷ではない。しかし、表1から市来の郷士数は1358人、石高は11061石、さらに村数は8村であり、郷士数・石高・村数の相関分析の図2・3をみると、郷士数・石高・村数ともに高いところに位置し、大郷と称される郷と同等の特徴を有している。それに、表1より野町・浦町が存在していたことから、経済的に栄えていたことも読み取れる。

これは、鹿児島城下町との主要経路における距離的關係にある。つまり、参勤交代の第一日目の宿所が市来にあたるのである⁽³⁴⁾。そのため、大郷までは特別扱いはされていないが、一日で城下まで着くという距離的關係および参勤交代で多数の従士を宿泊するための機能を備えておかなければならないという城下との関係から、郷士数・石高・村数が多くなっていると推察される。そのため、この市来には海江田・中原・若松・江夏などの豪商の蔵が立ち並び、人や荷物も多く動いた湊町で藩に米倉もあり、軍事面のみならず政治・経済面も充実した機能を有していたのである⁽³⁵⁾。

主要経路においては、国境付近はもとより、参勤交代の宿泊先という行政的つながりをもつ郷にはそれなりの機能をもたせ、城下町と位置的な連関があったことがわかる。

7. おわりに

本稿では、薩摩藩における外城制度を個々の外城（郷）として考察し捉えるのではなく、藩全域スケールで各外城（郷）と城下町との相互関係を加味しつつ、特に薩藩政要録を用いて郷士数・石高・村数の相関関係から分析した。その際、「海上防衛における郷と城下町」、「国境防衛における郷と城下町」、「城下町に近い郷」、「主要経路における郷と城下町」を中心に考察した。

結論としては、以下のことが指摘できる。

海上防衛における郷と城下町：鹿児島城下町が海上からの攻撃を警戒していたため、海上交通の要所で鹿児島湾入り口にあたる指宿と小根占の両郷を大郷とし、海上の防衛拠点として重要視していた。そのため、指宿・小根占は、大郷が石高の高い郷という一般的な傾向から逸脱していた。

国境防衛における郷と城下町：出水・大口・高岡が国境に位置し、かつ城下へつながる主要経路が通っていることから、大郷として高い石高、多くの郷士や村を有することによって外敵からの侵入に備えていたことが明らかとなった。

城下町に近い郷：谷山、伊集院、重富、加治木、垂水のような城下に近い郷は、大郷と称されるような郷士数・石高・村数が高い郷のみではなく、信頼における一門家・一所持・一所持格等の階層領主の私領地を配置しており、そのような郷の郷士数は大郷と同等の人数を抱えていることがわかった。

主要経路における郷と城下町：志布志は陸路海路ともに重要な郷であったため、大郷であるのと同時に郷土数・石高・村数が高い郷であることが数値からも明らかであり、藩の構造からみても重要視されていたことがうかがえた。市来は、参勤交代の第一日目の宿所にあたるため、一日で城下まで着くという距離的關係および参勤交代で多数の従士を宿泊するということから、大郷ではなくても、大郷と同等の郷土数・石高・村数を有しており、重要視されていたことが明らかとなった。

以上のことから、鹿児島城下町と薩摩藩の外城制度との間には明らかに因果関係があり、薩摩藩における外城制度を論じるにあたっては、藩全域スケールで各外城（郷）と城下町との相互関係をも加味することが必要であると考えられる。ただ、郷と城下町の間連性は、当然今回取り上げた事例・要因が決してすべてではなく、ほんの一例にしか過ぎない。他にも多くの要素が絡み合って郷と城下町はつながりをもっている。今後は、さらに多くの事例を分析していくとともに、防衛だけでなく政治・経済などの連性も加味し、もっと多面的な視点から郷と城下町を捉えていく必要があると考える。

付 記

本稿の一部は2002年11月の人文地理学会大会（於：お茶の水女子大学）において発表したものを大幅に加筆修正したものである。

注

- (1) 志布志町／編『志布志町誌 上巻』、志布志町、1972、203～274頁。
- (2) (のまち) 鹿児島藩内各郷に所在する町場として公認された商業地域（「角川日本地名大辞典」編纂委員会『角川日本地名大辞典 46 鹿児島県』、角川書店、1983、14頁）。
- (3) (うらまち) 浦に所在する町場として藩法上公認された商業地域（「角川日本地名大辞典」編纂委員会『角川日本地名大辞典 46 鹿児島県』、角川書店、1983、12頁）。
- (4) 鈴木公『鹿児島県における 麓・野町・浦町の地理学的研究』、鈴木公、1970、11～23頁。
- (5) 鹿児島県歴史資料センター黎明館／編『薩摩七十七万石』、1991、104頁。
- (6) 原口虎雄「歴史手帖 8巻3号（薩摩藩の外城制度と麓）」、名著出版、1980。
- (7) 押野昭生「史林（「麓」集落に関する二・三の検討）」、史学研究会、1957、52～81頁。
- (8) 前掲(4)
- (9) 大川晶平「薩摩の外城 一島津藩の麓町を訪ねて一」、日本古城友の会、1974（2000年再版）。
- (10) 筆者・出版社・出版年いずれも不明。鹿児島県史料刊行会『薩藩政要録 鹿児島県史料集』、鹿児島県立図書館、1960があり、この書物は1巻から6巻、そして要用集がある。
- (11) 島津家編輯所／編『要用集 5』1927。『要用集 上』として鹿児島県史料刊行委員会／編『鹿児島県史料集 28』鹿児島県立図書館、1988があり、『要用集 下』として鹿児島県史料刊行委員会／編『鹿児島県史料集 29』鹿児島県立図書館、1989がある。
- (12) 筆者・出版社・出版年いずれも不明。鹿児島県史料刊行会の『新修舊鹿児島藩領 国・郡・郷・村・浦・町附 上巻』に収録。
 - ①鹿児島県史料刊行会『新修舊鹿児島藩領 国・郡・郷・村・浦・町附 上巻』、鹿児島県立図書館、1983、37～126頁。
 - ②鹿児島県史料刊行会『新修舊鹿児島藩領 国・郡・郷・村・浦・町附 下巻』、鹿児島県立図書館、1983。

- (13) 筆者・出版社・出版年いずれも不明。鹿児島県史料刊行会の『新修舊鹿児島藩領 国・郡・郷・村・浦・町附 上巻』に収録されている。
- (14) 筆者・出版社・出版年いずれも不明。
- (15) 筆者・出版社・出版年いずれも不明。鹿児島県史料刊行委員会／編の『三州御治世要覧 36巻』, 鹿児島県立図書館, 1984 に収録されている。
- (16) 前掲(10)
- (17) 藩法研究会／編『藩法集 8』1969, 3~8 頁。
- (18) 前掲(11)
- (19) 出水郷土誌編集委員会『出水郷土誌』, 出水市役所, 1968, 281~476 頁。
- (20) 製作者不明「鹿児島城下町割図」, (鹿児島県立図書館所蔵), 寛文 10 年 (1670) 年頃の鹿児島城下を描いたものとされている。縦 105 cm×横 119 cm。
- (21) 製作者不明「旧薩摩御城下絵図」, (鹿児島県立図書館所蔵), 安政 6 年 (1859) 頃の鹿児島城下を描いたものとされている。「旧薩藩御城下絵図」は, 鹿児島県立図書館所蔵で縦 346 cm×横 452 cm の大図で, 裏には「旧薩藩御城下絵図面」と「永久保存」の貼紙があり, 「鹿児島県庁所蔵之印」が押捺してある。
- (22) 鹿児島県立図書館／編『旧薩藩御城下絵図』, 鹿児島県立図書館, 2001, (鹿児島県立図書館所蔵の安政年間「旧薩藩御城下絵図」の復刻)。
- (23) 鹿児島県維新史料編さん所／編『鹿児島県史料 旧記雑録後編第 3 巻』, 鹿児島県, 1983。この史料の巻 55 (慶長 7 年正月から 8 月) の「御文庫四拾八番箱中」「家久公御譜中ニ在リ」より。
- (24) 鹿児島市史編さん委員会／編『鹿児島市史 I』, 1969, 316~402 頁。
- (25) 根占郷土誌編さん委員会『根占郷土誌 (上巻)』, 根占郷土誌編さん委員会, 1974, 353~370 頁。
- (26) 大口市郷土誌編さん委員会『大口市郷土誌 上巻』, 大口市郷土誌編さん委員会, 1981, 346~358 頁。
- (27) 前期(26), 346~358 頁。
- (28) 前掲(4), 23~49 頁。
- (29) 国絵図に描かれた街道とはかなり異なるため, 「街道」とはせずに「経路」とする (鹿児島県教育委員会『天保九年「薩摩國・大隅國・日向國」国絵図解説書』, 徳田屋書店, 1998)。
- (30) 鹿児島県史／鹿児島編『鹿児島県史 第 2 巻』, 鹿児島県, 1967, 553~584 頁。
- (31) 前掲(30), 553~584 頁。
- (32) 前掲(1), 203~274 頁。
- (33) 前掲(10)
- (34) 前掲(4), 23~49 頁。
- (35) 前掲(4), 1~5 頁。

(関西大学大学院文学研究科・博士課程後期課程)